

近年、マレーシアの首都クアラルンプールを訪問すると、繁華街やホテルでアラブ人旅行者をしばしば目撃する。多くは幼児を連れた若い夫婦だが、女性が独特の黒衣を着用しており、容易にそれと知れる。両眼以外をすべて覆った女性も少なくない。華やかな色彩が踊る繁華街で、そうしたアラブ人女性と遭遇するのは異様な体験にも思える。だが、7～9月はそうした光景が日常的に目撃される「ムシム・アラブ」(アラブ人の季節)であるという。

旧知の文化人類学者は、2001年のアメリカ同時多発テロ事件以降、同国への入国が厳しくなったアラブ人

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第2回】

西尾寛治(防衛大学校教授)

ムシム・アラブ(アラブ人の季節)

して利用されてきた。正倉院所蔵の「蘭奢待(らんじやたい)」は、中国経由で輸入されたベトナム産沈香である。現在日本が輸入しているのも主に東南アジア大陸部のものだが、特に高品質のものを「伽羅」という。その香りはアラブ人をも魅了した。ただし、彼らは沈香の木片を香炉で燃やして香りを楽しむ。また、香水としての利用も独自のものといえよう。

東南アジアは、森林産物と海産物の宝庫として古来アジア各地の商人を引き寄せた。商品価値の高

7月に大挙現れるブキビンタンのアラブ人 黒衣の流入がもたらす伝統産業の再活性化



アラビア語看板を掲げる店舗。商品棚には色とりどりの香料が並ぶ。下段が沈香(NNA撮影)

が、旅行先を東南アジアへ変更したのだという。朝日新聞(2008年10月28日朝刊)も、タイのアラブ人旅行者急増を同時テロ事件以降と報じている。ただし、マレーシアでは1990年代末からの現象という指摘もある。実際、私がペナンにかなり多くのアラブ人が滞在中と聞き、空港で彼らと遭遇したのも10年ほど前のことである。

さて、アラブ人旅行者の増加に伴い、クアラルンプールでは過去数年間に一定の変化が生じた。そのひとつに、ブキビンタン通りにおける沈香専門香水店の急増がある。その数は10店程度ながら、タワー型の香炉の絵とアラビア語を記した看板があり、かなり人目を引く。そうした店ではカンボジア、インドネシア、マレーシア産(後の2者の採取地はボルネオ)の沈香から製造した香水や、焚香料用の沈香も販売している。インド東部原産の沈香は、日本でも古くから線香と

かった森林生産物は、チョウジ、竜脳(ボルネオ樟脳)、沈香などの香料類で、海産物の代表例には、フカヒレ、ナマコ、ツバメの巣など中華料理の食材があった。

ツバメの巣については、従来の天然物のほかに、倉庫のような建物を活用して効率的に採取したものを輸出するビジネスがインドネシアやマレーシアで近年活発化している。無論その背景にあるのは中国経済の飛躍的發展であろう。

沈香とツバメの巣はいずれも東南アジアでかつてから生産されてきたもので、それ自体は新しい商品ではない。だが、そうした前近代の交易の伝統が、アメリカ同時テロを契機とする旅行者増加や中国経済の発展により、形を変えつつ再活性化している点には注目しておくべきであろう。それは、前近代に世界の多様な地域と発展を共有してきた東南アジアの人々が、域内外の変動に際し、臨機応変に対応できる伝統を今なお保持していることをよく示している。

【執筆者プロフィール】1958年、鳥取県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了。文学博士。マレーシア・サバ大学講師などを経て、現在、防衛大学校人文社会科学群人間文化学科教授。専門はマレーシア・インドネシア近世史。「マレー政治文化」「マレー系港市国家」「マレー人概念と民族間の共存」など、マレー世界の歴史的展開を研究している。